

爾雅研究に関する覺書二三

著者	岩佐 貫三
雑誌名	漢文學會々報
巻	12
ページ	91-110
発行年	1942-06-20
URL	http://doi.org/10.15068/00146288

爾雅研究に關する覺書二三

岩佐貫三

内 容

- 一、爾雅注犍爲舍人
- 二、爾雅校勘に際して雪應本をめぐる阮元・臧庸の交渉
- 三、東漢に於ける魯詩學授受の一斑と爾雅の所産
- 四、鄭玄の評雅態度

一、爾雅注犍爲舍人

邵晋涵の爾雅正義に曰く。

註爾雅者。經典序錄。有犍爲文學注。諸書多引作犍爲舍人。或作舍人。文選注間稱郭舍人。疑卽一人也。

爾雅研究に關する覺書二三

と。

爾雅に注する所の隄爲文學、隄爲舍人、舍人、郭舍人の同一人説の是非に就いては古來より論がある。馬國翰所輯の玉函山房輯佚書、爾雅隄爲文學注の條には

爾雅隄爲文學注三卷。漢郭舍人撰。……或稱文學。或稱舍人。要是一人之言。と見えてゐる。

謝啓昆の小學考には

啓昆謂。正義舍人及隄爲文學並引異説。蓋二説本出一人。正義中稱舍人。詩疏稱隄爲文學。下一條乃正義覆述詩疏原文。故仍其稱耳。春秋正義爾雅疏皆然。非有兩人。文選羽獵賦注。前引郭舍人注。後引隄爲舍人注。亦偶々異其稱耳。とある。

又錢大昕の潛研堂集には

廣韻亦有舍姓。是舍人乃其人姓名也。

と述べ、龍啓瑞の爾雅集証には

隄爲文學與隄爲舍人卽一人也。

と云ふ。

更に洪頤煊は讀書叢錄に於て、

頤煊案。文選羽獵賦李善注引作郭舍人。西京雜記郭威字文偉茂陵人。好讀書。以謂爾雅周公所制而有張仲孝友。張仲宣

王時人。非周公之制明矣。疑卽此人。
と斷じてゐる。

卽ち大體に於て異名同人説を執つてゐる様である。而して此等諸家の根據となるものは實に、陸氏徳明の經典釋文序録の

隗爲郡文學卒史臣舍人。漢武帝時。待詔云々

の記事であらねばならぬ。

宋于庭は過庭録に論じて、

經典釋文叙録。爾雅隗爲文學注三卷。一云隗爲文學卒史臣舍人漢武帝時待詔。錢小詹事大昕云。廣韻有舍姓。蓋其人姓

舍名人。孫御史志祖云。案文選、羽獵賦注引郭舍人爾雅注。是其人姓郭。漢書東方朔傳有幸倡。郭舍人正值武帝時、豈

卽其人邪。蓋本隗爲文學卒史而入爲舍人。名則不可攷矣。

翔鳳案。孫君據選注斷爲舍人是矣。

然舍人由文學卒史。入爲待詔。非入爲舍人也。

舍人太子官屬。非近侍官名。則朔傳之郭舍人正注爾雅者。舍人當是其名。

と斷じてあれば、大體に於て諸家の説は同一人たるに反しない。

只こゝで筆者は現存の隗爲文學注殘存注によつてこれらの問題がある程度迄判定を試み様と思ふ。

卽ち次例の如くこの隗爲文學注乃至舍人注と所稱のものに明に同一人の筆法によらざるものと認められるものを見出すので

ある。

○謔浪笑敖、戲謔也。(釋詁篇)

捷爲注。謔、戲謔也。浪、意明也。笑、心樂也。

敖、意舒也。戲(笑)邪戲也。謔笑之貌也。

○勞來強事謂弱勤也。(釋詁篇)

捷爲注。勞、力極也。來強事也。(一切經音義卷九・十一・十三所引)

○供侍共具也。

捷爲注。共具物也。侍具事也。

右の諸例に於ける如く同一人の筆法でなく、重複・加字の跡が見られる。

次に

○横々尅々武也。(釋詁篇) 捷爲注。横音女皇反(王函山房輯佚書)

○爽々躍々迅也。(釋詁篇) 捷爲注。爽失石反(玉函山房輯佚書)

の如き反切を舍人注に見得ることである。

錢大昕の十駕齋・食新錄卷五によれば

孫叔然創爾雅音義。是漢末人。獨知翻語至於魏世。此事大行。經典釋文云。孫炎始爲翻語。魏朝以降漸鮮。張守節史記正義。魏秘書孫炎始作翻音。

と云ふ。即ち魏・孫炎時代より創始と考へられる反切法を少くとも漢武の時代、舍人の慣用法として注中に挿入したか否かが疑はしい。未だ讀若の時代にあつたと考へて良い。

以上の所論により論勿く、隗爲注は後世の鼠入補加の説のあることは知られ、これらの所傳乃至所引の郭舍人・隗爲文學注を以て同一人の手法によらざるものであることは容易に認め得る。

而して結局吾人は、現在の資料では郭舍人、隗爲舍人が同一人なるか否かを決定し得ぬが次の二項は少くとも斷言し得ると思ふ。

一、現存の玉函山房輯佚書所收の舍人注、隗爲舍人注は結局同一人の筆法に非ざるものである。

後人の附加補入をみとめ得る。

二、郭舍人は東方朔と同時代の郭舍人に非ざること。即ち反切の用法から考へても、も少し時代を降さねばならぬ。

二、爾雅校勘に際して雪總院本をめぐる阮元・臧庸の交渉

(釋詁篇)

瘖 病也。雪牒本作瘖。(臧輔堂・拜經堂叢書所收雪牒本)

愉 勞也。雪本作颯。

頰 視也。雪本作規。

(釋言篇)

祺 吉也。注祥吉之先見。雪本作謂吉之先見。

(釋訓篇)

懋々懋々勉也。注皆自勉強。雪本作自強勉。(阮元曰。此當從雪牒本)

(釋宮篇)

石杠謂之荷。注聚石水中以爲步渡荷也。

雪牒本作荷。(臧氏白。當作荷)

(釋天篇)

奔星爲杓。約。雪牒本作杓。(臧氏曰當作杓)

(釋樂篇)

所以鼓敵。謂之箠。注刻以木。長尺。櫟之。

雪牒本作擦。

(釋地篇)

西方有北肩獸焉。與邛邛。岷虛北。雪本作邛邛。

(釋草篇)

蓄鉅邛。雪本作邛鉅。

(釋木篇)

椶柜柳。雪本作柜鉅。

(釋鳥篇)

興鷄鷄。雪本作興。

(釋畜篇)

四散皆白驢。四蹄皆白首。雪本作驢。

駉牝驢牡。雪本作牝。

雪牒本を所藏せし藏齋堂と雪牒本を用ひて十三經注疏校勘の事に當りし阮元の兩人の交渉は書誌學上の一挿話たるに十分足りると思ふ。

經籍叢話後序に

小宗伯。儀徵阮公。視學浙江。以經術倡迪。士子思治經。必先通訓詁。庶免鑿空逃虛之病。而倚古以來。未有彙輯成書者。

因遴拔經生若干人。分藉箋訓。依韻歸字。授之凡例。示以指南。募年分纂成。更選其尤者十人。每一人彙編一聲。知舖堂留心經詰。精力差勝。嘉慶三年春移書來常州。屬以編々之役。舖堂不辭謏陋。謹遵宗伯。原例申明而整齋之。以告諸君子。復延舍弟禮堂相佐。請諸宗伯云々。……とあり。

之に依て阮と臧の交渉の程度が察知される。即ち舖堂は阮元の下にありて纂輯の事に當つた事と思はれる。

序末の「嘉慶戊午夜九月三日武進臧舖堂識於浙學使院之謨詰齋」とは纂詰完成の年とみて良い。

而して嘉慶戊午は嘉慶三年であり、臧庸三十二歳の時にあたる。(清代通史・清代學者生卒及其著述表に据る)

而して阮元三十五歳である。既に壯年の頃の盟友たりし事が判る。

然らば十三經校勘の事業は何時頃なるか。嚴元照の爾雅匡名・段玉裁序によると次の如く見えてゐる。

近日阮芸臺中丞爲爾雅校勘記云々。

嘉慶八年正月。金壇段玉裁。書於姑蘇下津橋朝山墩之枝園。

而して臧の死は嘉慶十六年(一八一一年)にあり。従て兩者の交渉は臧の晩年迄續いたと思はれるし、又臧は阮元の十三經校勘の編輯に司はつたものと考へられる。

以上から判断する時、何れ兩者の間に臧の生前に於て雪認本に關する交渉があつたものと思はれるし、又之を阮が爾雅の校勘に際して用ひたものと思はれる。

従て兩者の參考した雪膠本は先づ同一のものであるといふ判断を下しても敢て論理の飛躍でないと思ふ。

三、東漢に於ける魯詩學授受の一斑と爾雅の所産

陳氏喬樞の魯詩遺説攷自序中に云ふ。

爾雅亦魯詩之學。漢儒謂爾雅爲叔孫通所傳。叔孫通魯人也。臧輔堂拜經日記以爾雅所釋詩字訓義爲魯詩。充而有徵。……然らば魯詩と爾雅の關係を云々するならば必然的に叔孫通について考へねばならぬ。

叔孫通の爾雅補足説の所據となるものは前述の張揖の上廣雅表にあらはれたる

「周公著爾雅一篇。爰暨帝劉。魯人叔孫通撰置禮記。文不違古」

の所説及び陸德明の經典釋文序録中にみえたる

「叔孫通所益……」

の二事である。

漢書・列傳四十三卷によれば

「叔孫通薛人也。晋灼曰。楚漢春秋名河。秦時以文學。徵待詔博士。……」
とある。

叔孫通の學統及魯詩授受については甚殘念乍ら研究資料にかき明確にされぬ。只張揖の言は相當信を置いて良いものと思ふ。

清儒・陳壽祺も

「禮百三十篇之記。第之者劉向。得之者獻王。而輯之者。蓋叔孫通也。魏張揖上廣雅表曰。周公著爾雅一篇。爰暨帝劉。魯人叔孫通。撰置禮記。文不違古。通撰輯禮記。此其顯證。稚讓之言。必有所據。爾雅爲所採。當在大戴禮中。通本秦博士。親見古籍。……」(左海經辯)

と張揖の補足説を肯定してゐる。

或は又今文學者の皮錫瑞も三禮通論に於て張揖説を左證してゐる。

禮記爲叔孫通所撰。説始見於張揖。揖以前無此説。近始發明於陳壽祺。祺以前亦無此説。壽祺引臧庸以證禮記中有爾雅。尤爲精確。

以上の如く張揖の所説の確實性から叔孫通の補足説を一先づ信じ、この見地から魯詩の授受を考へて見る。

陳氏遺説考によれば

申公受詩於浮邱伯。伯者荀卿門人也。劉向校錄孫卿書。亦云浮邱伯受業於孫卿。爲名儒。是申公之學。出自荀子。

といふ。

魯詩と荀子の關係は又必然的に荀卿を中心として齊の稷下派學と魯詩の關係に結びつく。

内藤博士は釋言篇を以て稷下派學全盛の頃の所産としたがこの事も強ち附會でない様である。(内藤湖南博士研幾小録中爾雅の新研究参照)

更に釋訓篇の形態を以て魯詩との關係を推すならば釋訓篇こそ魯詩の解釋書と云て良い。

さすれば釋言・釋訓兩篇所産の目的と意義は齊詩より魯詩へと移動する過程にあつたと考へられぬか。

而して浮邱伯を秦時の儒生とし、申公を漢高の時代とするならば叔孫通は秦時の博士であり、この間の人でなければならぬ。〔註一〕

(1) 漢書儒林傳云。師古漢書集注引服虔曰。浮邱伯齊人秦時儒生。

(2) 史記儒林傳・張守節正義參照。

而して浮邱伯と叔孫通の交友についても何ら文獻の徵すべきものがないが但、若し二人の間に詩の授受ありとせんか。浮邱伯は荀卿の門人たる以上稷下の流を汲む人であり、こゝに叔孫通と魯詩の關係は勢深くなつて來る筈である。

而して次に考へねばならぬは叔孫通の禮記中に爾雅を撰置したといふ問題である。形態上に於て否定し得ぬ關係を見出す。即ちこゝに禮記中に爾雅を含有せしめる考方と、別に爾雅中に釋禮一篇をたてる説の二つがあり得る。

この兩説の判定を先づ爲さねばならぬ。

なる程一見、後者の説は今日殘存の形態上からするならば尤もなる判斷である。されど何れもその疑を持つ部分(例……釋天篇中・祭名・講武・旌旗)は後代補入の部分であり、この説は先づ根拠が薄弱である。しかるに前者に到つては相當信用すべき根きよがある。

即ち武進藏庸の經義雜記中の考證と叔孫通の撰置禮記問題が之である。この兩説本より十分なる確證とはいへぬが先づ今日

では信据せざるを得ぬ。然らば筆者は古型爾雅は別個のものにして、叔氏の補足と同時に禮記中に補入せられたものに非ずやと思惟する。

即ちこの問題は叔孫通一個の行爲によると判斷したのである。従て彼以外の見るところの爾雅はそのまゝ傳はり、以て今日の如きものとなり、又叔孫通の補入したものは時代と共に再ぶとり去られたものに非るかと思惟する。

次に問題となるのは叔孫通果して魯詩を以て家學と爲せしか否かの問題である。

三家の詩の遺説の分類方法に未だ完全なるものがないと云て良いが單に彼が魯人なる理由を以て魯詩を補したであらうといふ推定はかなり危険性を有してゐる。

叔孫通その人の魯詩を家學とするといふ理由以外に魯詩と爾雅の關係を見出すことができぬか。若し魯詩を以て子夏・荀子の系統とするならばこゝに齊學と魯詩學との關係を如何にみるかといふ問題がおこる。

即ち齊學と魯學を以て截然と區別し得るといふ喬樞の考は果して學問的に地方的系統を判然と兩分し得るものであるかといふ問題が之に先行し、之が解決を得るならば、子夏の徒と爾雅の關係を齊・魯の矛盾と解釋する必要がなくなる。即ち齊魯兩學を時代的相異を主とした派學として地方的區別を重視しなければ問題はないのである。以上により筆者は爾雅・魯詩の關係をみとめざるを得ない以上、爾雅の製作を子夏・荀卿迄遡らしめるか、將又齊詩先づ衰へ魯詩の全盛時代の所産とみたいのである。

而して叔孫通の問題は單に禮記と爾雅の相關關係を與へんとするもので叔孫通が魯人なるの故を以てとのみ斷ずるのは早斷であると思ふ。

最後に考へるべきは魯詩學派の人々の間に如何なる程度迄、爾雅が重用されたといふ問題であるが後日の問題とする。

四、鄭玄の評雅態度

從來鄭玄が爾雅を見て居たかについていろいろ問題がある。

周禮・春官大宗伯の賈疏の

爾雅云。北極謂之北辰。鄭注云。天皇北辰耀魄室

とあるを以てすれば彼は爾雅を讀んでゐたは勿論、その注釋もあつたと信ぜられる。

尤も阮元は之を

此鄭注文耀鉤也。上引文耀可證。因文承爾雅之下。而或云鄭有爾雅注。誤讀此三疏矣。(周禮校勘記)
と非し、胡元儀は北海三攷・四注述攷下に於て

細玩賈疏。其義自明。雖別無明文。此疏一引即明文矣。又安得謂鄭君未注爾雅耶。

として阮説を駁してゐる。

が筆者は鄭玄に爾雅注のあつたとする説に左袒したい。且その箋詩に於ても爾雅を採用したことを認める一人である。從て鄭玄の他經(三禮・周易・尙書・論語・孝經)注にも當然この影響をみとめねばなるまい。

只詩箋の場合雅文を引いたか魯詩を引いたかは明瞭に區別されねばならぬ。結局同一の問題に歸趨するとしても方法論に於て分岐する。

以上の假説の下に筆者は次の論旨をすゝめ行かふと思ふ。然らば鄭玄が爾雅そのものを如何に考へたか。而して又、之を如何なる程度迄彼の諸經注の注文中に引用せしか。今次の順序を以てこの問題を取扱つてみることにする。

一、毛詩鄭箋と雅文

二、禮記鄭注と雅文

三、儀禮鄭注と雅文

四、周禮鄭注と雅文

周易鄭注と雅文

尙書鄭注と雅文

論語鄭注と雅文

孝經鄭注と雅文

一、毛詩鄭箋と雅文

抑々爾雅の書たるや釋詩解詩の一字書たることは免れ得ない事實である。而して爾雅を鄭玄は如何に解詩の上に用ひたであらうか。

鄭箋の中に爾雅曰として引用した個所は筆者の調査した所、一つも見當らぬ。但し釋詁・釋言・釋訓篇等の今爾雅の經文と合致するものは大體に於て一字の解と考へられるもの一百三十有餘。句の解と考へられるもの十二餘を教へられる。即ち學者の例としては爾雅本來の□ハ□也の形式をとる。

谷風……就其深矣。方之舟之。鄭箋方舟也。(釋言)後者の例としては、

白華周人……鴛鴦在梁。戢其左翼。鄭箋鳥之雌雄不可別者。以翼右掩左雄。左掩右雌。(釋鳥)

桑柔……天降喪亂。滅我立王。降此蝥賊。稼穡卒瘁。鄭箋蝥食苗根曰蝥。食節曰賊。(釋蟲)の如き形式をとる。

彼の姚鼐が新學偽經考にいみじくも云へる。

爾雅訓詁以釋毛詩周官爲主。釋山則有五嶽與周官合。與堯典異。釋地九州與禹貢異。與周官略同。釋樂與周官大司樂全。の天與王制異。祭名與王制異。與毛詩周官合。

の事實を蓋し三千年の古に於て鄭玄は顯現してゐるものと云ひ得る。

特に釋訓の形式が釋詩の爲の辭書形式に非ずとしては理解し得ない點からみても鄭玄の詩箋を草するや、之を多分に參照したであらうことは想像に難くない。而して毛傳と鄭箋の解釋の上で相違する所を鄭が爾雅に依て明快に解決せる例を見るに於て尙然りである。

周頌・清廟「秉文之德。對越在天」

毛傳(駿、長也)

鄭箋（駿、大也）（釋詁篇）

雅文と鄭箋の關係は以上の如く、鄭その人の釋詩上の態度から又、爾雅そのものに對する彼の價值批判の問題を後行して來る。

二、禮記鄭注と雅文

禮記注に見られる鄭の引用雅文の例に就いては檀弓上の

天子棺四重。水兕革棺被之。其厚三寸。輅棺。

釋鄭注「所謂輅棺也。爾雅曰輅輅」（釋詁）の「爾雅曰」と明言せる例は禮記鄭注の他の部分で見られない例である。而して月令の

「冰方盛。水澤腹堅。命取冰」の鄭注

「此月日在北陸。冰堅厚之時也。北陸謂虛也」

が釋天篇の引文であり、又「學記」中の

「古之敎者家有塾。黨有庠。術有序。國有學」

の「門側之堂。謂之塾」の鄭注が釋宮篇の引文であること等は鄭の時代と爾雅の形態に對する時代的考證の一論據となり得ると思ふ。

即ち換言すれば釋天・釋宮の二篇は少くとも鄭玄の時代には編成されてゐたことを證し得る。後儒の補成說に對して一示唆

をあたへたものと思ふ。更に禮記中の引詩に際して鄭玄が爾雅の文を以て註せる部分の多いのは詩と雅の關係を裏づけるものと思ふ。次に三禮の中儀禮鄭注に就いて考へてみることにする。

三、儀禮鄭注と雅文

士冠禮「主人玄端爵韞。立于阼階下。直東序西面」

の鄭注「東西牆。謂之序」(釋宮文)

又「孝友時格。永乃保之」の鄭注「養父母爲善。善兄弟爲友」(釋訓文)、又同じく士虞禮「羹飪升左肩……」の鄭注「肉謂之羹」(釋器文)、「佐食無事則出戶負依南面」の「戶牖之間。謂之扆」の鄭注(釋宮文)等を散見した丈でも禮に對する釋注の上に鄭玄が爾雅の後半篇の各諸篇中より引用してゐることが見られる。

而して儀禮に於ては禮記の場合と同じく「爾雅曰」と明言してゐる場所が只一個所のみ見られるのみである。

有司徹……爾雅曰。釋又祭也。(釋天篇)

四、周禮鄭注と雅文

新學僞經考の筆者に従へば爾雅は元々釋周禮の意圖と目的を持つ字詁書である。しからばこの兩者の關係は如何。即ちこの周禮鄭注中には爾雅曰と明言せるものが六個所の多きに見られるのである。

(一) 天官冢宰「乃立天官冢宰。便師其屬」の爾雅曰、冢大也(釋詁篇)

- (二) 食醫「凡會膳之宜。牛宜稌。羊宜黍。豕宜稷。犬宜粱。雁宜麥。魚宜菰」の爾雅曰「稌稻也」(釋草篇)
- (三) 天官冢宰下。澤虞「每大澤大藪、中士四人。下士八人。府二人。史四人……」の鄭注「爾雅有八藪(釋山篇)」
- (四) 春官宗伯・廋人「馬八尺以上爲龍。七尺以上爲騾。六尺以上爲馬」の鄭注「爾雅曰騾牝驪牡。玄駒。馬衣驂(釋畜篇)」
- (五) 秋官司寇第五「萍氏下士二人。徒八人」の鄭注「爾雅曰。萍泝。其大者蘋」(釋草篇)
- (六) 秋官司寇下「口誥四方邦國。及其都鄙。達于四海。」の鄭注曰。九夷八蠻六戎五狹謂之四海(釋地篇)
- の問題から雅文と周禮の關係の比較を爲す必要がある。
- 「爾雅曰」の問題を如何に考へるか。鄭司農說中に「爾雅曰」と明言せる例は多々あるのより見れば前述の六例もこの範疇に入れるべきであらうか。但しあまりに臆斷すぎる嫌なきか。とまれ殘された問題の一つである。

五、鄭氏佚書所收の諸經鄭注と雅文

尙書・禹貢「沱潛既道」

の孔疏に本づけば次の鄭注が引用され得る。

爾雅水自江出爲沱。漢別爲潛。

即ち爾雅と明言せる引用文である。

又周易・下經・損卦・六五「或益之十朋之龜」の鄭注を疏中より引用すれば

爾雅云。十朋之龜者「一曰神龜。二曰靈龜。三曰攝龜。四曰寶龜。五曰文龜。六曰筮龜。七曰山龜。八曰澤龜。九曰水龜。

十日火龜

とみゆ。

尤も今の爾雅・釋魚篇には十朋之龜。者之五字を缺く。鄭注と今爾雅の時代的差隔はこの五字を異同さしたとみらるゝがこの問題よりも鄭所見の釋魚篇の方が今爾雅より完備の形式をもつといふ矛盾を見出し得るわけである。又、論語學而篇第一の

如切如磋。如琢如磨

の鄭注。骨曰切。象曰磋。玉曰琢。石曰磨。を釋器篇の。金謂之鏤。木謂之刻。骨謂之切。象謂之磋。玉謂之琢。石謂之磨の引用とするは妥當か否かも容易に決しがたい。

以上周易・尙書・論語・孝經の諸經鄭注に引用されたと考へらるゝ雅文について考察したが、毛詩・禮記・儀禮・周禮に於ける鄭注の雅文の引用句と比較する時は、はるかに數に於て少い。

而して鄭その人の爾雅に對する考へ方は依然として雅は釋詩の一小學書たるの觀念にすぎぬものと思惟される。但、爾雅の古型體は釋詩の爲のものではない。むしろ字詁解書の最古の型式を持つ獨自の存在價值を持つところの字義書である。それが補綴され増補補されてゆく過程に於て毛詩學者に依て一の釋詩書として思惟され改纂されたものと考察する。而して鄭玄その人の考へ方は釋詩の爲に存在價值を認めてゐる様である。

附記

編輯委員に乞はれるまゝに心ならずも貴重な頁を浪費した事をお詫び申上げる。右は小生卒業論文作製當時の札記中より抄録したる二三の覺書である。(貫誌)

昭和十六年九月